



皮膚科医の病気をめぐる冒険

医療を超えたクロストークで
辿り着いた新しい自分

大塚篤司=編著

定価：2,200 円 (2,000 円 + 税 10%)
B6 判・224 頁 / 新興医学出版社 / 2023
[ISBN978-4-8800-2900-9]

ロジックと破裂の先にある晴れ間

評者 | 市原 真 札幌厚生病院病理診断科

「出るマトは撃たれる」というフレーズをご存知だろうか。

クレー射撃をご覧になったことがある方ならイメージしやすいかもしれない。

あなたの手元には、弾を込めたライフルが置いてある。射台が整然と並び、眼前にただっ広い空間が広がっていて、放出機からマトが勢いよく飛び出す。クレー射撃で大切なことは、射手の腕はもちろんのこと、「マトが撃ちやすい場所に飛び出てくること」ではないかと思う。

話は変わって、医者という生き物は、概してロジカルに振る舞うのが得意である。本書の著者である皮膚科医・大塚篤司も、ご多分に漏れず整ったロジックの使い手だ。医療系書籍は、著者の理論に価値が発生するタイプの商品であるから、本書も大塚の理路を開陳すればそれで十分販売の意義は達成できたはずである。

しかし、なぜか、大塚は業態の異なるさまざまなゲストの前にわかりやすく飛び出てパチュンパチュンと撃たれていくほうの道を選んだ。その姿はまさに「出るマト・ロジスト (dermatologist)」。本書に登場する7人の射手たちが「クレー」を丁寧に撃ち抜いていく。

おわかりかと思うが、むりやりダジャレに結びつけるために450字を使った。ただし、このなかには本質的な問いも含まれている。

大塚は、なぜ本書において、自ら出るマトとなったのか？

ひとりの医師の内省がひらかれ、1つひとつ破裂させられていくような展開をする本書で、彼はインタビュアーでありながら逆質問を受けてタジタジとなり、魔法のような解決に至らない慢性疾患に思いを馳せ、「虫のいる・いない」で丁々発止した過去の外来経験を恥じ、彼個人の体験を解釈し直す名医の一言に目を潤ませる。行動経済学や組織行動学、医学部で習わない理論にも果敢に飛び込んで、従前の医療の手さばきを解体して組み直そうとする姿勢は、どこか泥臭く、そして誇り高い。大塚は、医療という霊峰を一步また一步とずり上がっていくにあたり、自らを大事に箱に入れて博物館の隅に置くのではなく、マトとして飛び出ることを選んだ。その挙げ句に、峻険の8合目付近で、無二の知己によって「や、それは患者の決めることだから」と優しく撃たれて昇天するのである。見事な構成！ マゾい！ クレーがはじけ飛ぶような快感がここにある。本書のタイトルが「医療をめぐる冒険」ではなく「病気をめぐる冒険」なのもいい。患者と病気の物語においては医療で解決しがたい領域がこんなにあるのだと、読む私が気づいて撃たれて気持ちよくなっている。いつの間にか、読む側の心にもマトが出現し、破裂音が鳴り響く。

本書のコンセプト自体は、真似しようと思えばそう難しくはない。対談形式で類書をつくろうと思えばすぐに「ガワ」を再現することはできるだろう。しかし各章末の、視界が晴れ晴れとひらかれるような秀逸なコラム、あれは大塚にしか書けない。彼が単に出るマトだけでは本書は成り立たない。一流のロジストでなければムリだ。デルマトロジストでなければ作れない本なのだ。⑥